

ケニアでも私は生徒であったと思う

吉岡 航希

この半年間を振り返り、私はここでも生徒であったのだと思う。2013年の6月から半年間を通して教室建設・補修を担当し、後半の3か月からは環境活動も担当させてもらった。どれだけ、現場と真剣に向き合えたであろうか。忙しさを言い訳に逃げることも多々あった。できたことよりもできなかったことの方が多いだろう。CanDoの考え方や仕事への向き合い方を掴めたと思えば、次の日には自分の浅はかさを痛感する。楽しかった思い出よりも辛く苦い思い出の方が多い。

それでも、真剣に向き合うことができたと自負できることがある。レンガは徐々に積み上がり、教室としての形を成していく。その過程からは保護者が、完成した教室では子ども達が多くのことを学んでいくのかと想像すると、やりがいを感じた。ここで得た経験は、そのどれもが「勉強になった」と今では思える。大学生の私が言うのも可笑しい話だが、この半年間は勉強の毎日だったのだ。

言葉にすることは難しいが、建設活動の現場から、私が確かに多くのことを学んだ。そういう意味では現場は紛れもなく私の教室であったし、そこでの私は教室の生徒であったのだと思う。